

広瀬淡窓「老子摘解」現代語訳

1. < 道可道章(上篇第一章) >

道の道とすべきは常の道に非ず。名の名とすべきは常の名に非ず。

道とは、「人の行うべき道」のことである。親に仕え、君に仕えるには、皆な相応の宜しきところがあるものである。そのやり方をさして道というのである。たとえば、親に仕える道は「隠すことあって犯すことなし」、これを「孝」という。君主に仕える道は「犯すことあって隠すことなし」、これを「忠」という。しかし、「孝」の道を以て君主に仕えれば「不忠」となり、「忠」の道を以て親に仕えれば「不孝」となる。

だから「忠」や「孝」はいずれも常名ではない。常とはどこに用いても易わらないのと言う。「常久不易の道」という心である。名とは、「孝」といい、「忠」というすなわち我々が付けた名前のことである。身の行うより言えば、道といい、口の称する所よりいえば名という。実は同じ物である。

無名は天地の始めなり。有名は万物の母なり。

前述したように、天地の始めから道というものは常道はあるのだが、何とも名が付けられないので、名前は無かったのである。時代が進むにつれ、自然と物の名ができて、孝不孝、忠不忠の区別が明確にされてきた。それから名前が名前を生み出し、万物それぞれに名前が定まったのである。

このように、万物は開闢以来あるものなのだが、名前ができたことにより始めて特定したものとして位置づけられ、万物が新たに出生したかの如くである。故に**有名は万物の母**と言ったのである。

故に、常無は以てその妙を觀んことを欲し、常有は以てその徼(きょう)を觀んとす。

二句は学者の工夫を言ったのである。常無とは常無名である。常有とは常有名である。試みに道に名を付けずに置いてみることにしよう。どちらに向けても滞るということが無く、誠に妙なる物である。又、逆に世間の通り、事々物々に名前を付けてみよう。名前の数は何千となくあり、こちらの理はあちらの理に合わず、通じないためお互い差し支えてしまう。すなわち徼(きょう)ある事になる。徼(きょう)とは国境の意である。通ずるところあれば、通じないところもある。

この両者は、同出にして名を異にす。同じくこれを玄と謂う。玄の又玄は衆妙の門なり。

両者の「両」は「妙」と「徼(きょう)」を指す。同じく玄妙の理である。又その奥に二つのものの出る所があり、これを又玄という。この所の一切の妙、ここは言語で言い尽くせない。

この章は「老子」の首章で、立言の大意を述べたものである。凡そ物質があれば名前がある。しかし名立って実離れる。「莊子」に「名は実の賓なり(名は実の客人)」(逍遙遊篇)とある。しかるに世人は名に惑いて実を失い、たとえば尾生(びせい)という男が女と橋の下で会う約束をしたが、女は来ず、大雨で増水したのに待ち続け遂に溺死した所謂「尾生の信」を認めて信としたり、正直といえは父親が羊を盗んだのを役人に通報した直躬という男を正直者であるとしたりする。(「論語」子路篇 注参照)

それゆえ「老子」は物に名を付けない。これを「無名の学」という。しかし全く名前を廃してしまうと世上通用しない。よく道理さえ知っていれば名前があっても害は無い。名を付けないと滞りなく妙なことは勿論だが、名ありと雖もその道理をよく理解して名実ともに離れないようにすれば、これ又一種玄妙の理である。ゆえに同じくこれを玄と謂う、と言ったのである。

凡そ一切の是非利害は皆な仮に付けた名前であって、その実は糾(あざな)える縄の如く分別しがたいものである。所謂「東家の西は西家の東」である。仏教家の語に「本来東西無し、何処に南北有りや」とあるが、これすなわち常無常有である。この道理を手近な例で喩えれば、当時流行する真金・銀札で悟るがいい。常道常名は真金のようなもので天下に通用しないことは無い。これが「妙」だ。一方仮道仮名は銀札の如しで、その国で通用することは真金同様だが、境界(他国)に持っていけば一銭にもならない。忠は孝ならず、孝は忠にならない類である。これが徼(きょう)である。又玄とは、玄の一層奥に又玄がある。それより一切の妙所が出るというのである。この一層というのは有にも非ず、無にも非ず存在する。

<注>

葉公が孔子に話した、「私どもの村には正直者の躬という男がいて、自分の父親が羊を誤魔化したときに、息子がそれを知らせました。」孔子は言われた、「私どもの村の正直者はそれとは違います。父は子の為に隠し、子は父の為に隠します。正直さはそこに自然に備わるものですよ」(「論語」岩波文庫)

2. <天下皆知章(上篇第二章)>

天下皆美の美たるをすれば、これ悪のみ。皆善の善たるを知れば、これ不善のみ。

美は美しいことである。悪は醜いことである。美しいものも、美しいと見えるほどになつては、後は醜くなる。善事も善と見えるほどになれば、後には又疵(きず)が出て不善と成る。美も善も人の知らぬようにあるのが真美真善である。そのやり方は後にいう無為にある。

故に有無は相生じ、難易相成し、長短相形し、高下相傾く。音声は和し、前後は相隨う。

これより以下は、喩えを引いて前二句の意を明らかにしている。たとえば、人が金銭を蓄えている、というのは有である。これを用いれば無となる。これが有より無を生ずるということだ。一方一銭も無いのは無である。そうすると働いて蓄えるようになる。これが無より有を生ずるということである。

川下より舟に乗って川上に行くのは難しい。帰りに下るのは易しい。これが難より易を成すということで、初め川下に下るのは易しく、帰りに上るのは難しい。これが易より難を成すということである。

一本のものを二つに切って用いるとき、始めを六尺に切れれば残り四尺になって短い。始めを短くすれば後は長くなる。これが長短相形するということである。

傾くとは、向こうのものをこちらに移し取ることである。たとえば、川の上に岸があれば、岸の土が川に食い込むようになる。これが低きより高きを傾けたことになる。又、川浚(さら)いがあって、川の泥を岸に上げるとすれば、これが高きより低きを傾けたのである。

自分がものを言えば相手から自分に答えが反って来る。しかも自分が悪言を以てすれば相手も悪言を以て答えるし、美言を以てすれば美言を以てするものである。見物することがあるとして、自分の前にいる人は「前」である。事が終わって退くときは、前にいた者は必ず「後」になり、後ろにいた人は必ず前に出る。これが前と後ろとが相隨うというのである。

以上の喩えは、皆な前に善あれば後に悪あり、左に利あれば右に害があり、従って先述した美は悪となり、善は不善となる理由がこれで理解できるはずである。たとえば、人が急病に罹り、医師が劇薬を用いてこれを癒したとすればこれは美であり善である。病人も命を救ってくれた恩を感じる。しかしその劇薬が残っていて、又他の部署が痛み副作用などがでれば、これは悪となり、不善となる。そのときは医師を怨ん

でしまう。一切の世事は皆このようなものであるから、容易に手出しされぬものだという意なのである。

これを以て聖人は、無為の事に處(お)り、不言の教えを行う。

これを以てとは、前に言ったように、世間のことは一切手が出せぬものだから、ということを指す。聖人というのは、知恵が深く過去現在未来を一目で見通した人である。世事には手が出せぬものながら、世にいて木仏の如くしていることは許されないことである。それゆえに**無為の事**というものがあるのである。いくらやっても一向にしなかったと同じ、**不言の教え**と言って、どれほど言っても言わないことと同じ、聖人はこれを行う。だから後の難を逃れるのである。

万物作(おこ)りて而して辞せず。生じて而して有せず。為して而して恃(たの)先ず。功成りて而して居らず。それ唯居らず。これを以て去らず。

これより以下は、無為のやり方を説いている。万物とは万人というようなもの。作とは事を思い立つこと。辞せずとは万人から思い立って、こちらに頼むときは辞退せずに引き受けること。万人が頼むことをやるわけだから、どんなことをしても自分がするのではなく、人がそうせしむるのである。すなわち「無為の事」である。

次の三句は事が成就したときの心得を言っている。生じるとは事が成就したこと。有するとは自分のものとする。恃むは功を誇る。三句同じことだが繰り返し述べたのである。

さて、人の頼みについて事を起こす。万人が同一に望むことだから格別に骨を折らずとも事は成就する。その成就したときに、我が功績にせず、「私は人のあとに付いて働いただけ。事がうまくいったのは皆さんのお陰で私一人の功ではない」と言って、恩賞などは少し戴いて早々にその場を立ち退くのである。これを「生じて而して有せず。為して而して恃(たの)先ず。功成りて而して居らず」というのである。ここまでが無為のやり方である。

それ唯居らず。これを以て去らずは、無為の効能を述べたものである。功を人に譲るのは、損のようで実はそうではない。凡そ成ることあれば必ず敗れることがあるのは先述した通りである。従って功を我がものにすれば又後難に係りあうことがある。早く立ち去るときは、その患いがなく、その身を全くすることができ名誉も後に残るものである。これが「居らぬから去らぬ」という理なのである。これがすなわち真美真善なのだ。我が功名を人に譲るゆえに皆がこれを目指さず、後の禍は無い。

無為とは人形のように何もしないという意味ではない。又、人が思い立てば何時でも同意するということでもない。凡そ事には始める時節がある。そのときに自分から始めなければ、きっと他人が始めるものだ。人が始めた上でこれに従う、これが無為ということである。

不言の教は、無為のことに準じて理解すべし。自分が言うべきことを言わずにおけば、人から自分に言わしめる。かくして自分が言うに非ずして人が言うのだ。これが不言の教である。

3. <上善若水章(上篇第八章)>

上善は水の若(ごと)し。水は善く万物を利して争わず。衆人の悪むところに處る。故に道に幾(近)し。

上善とは、善のやり方にも種々あって、そのやり方が上手なのを上善という。そのやり方は水に似ている。水は一切のものを潤して利益多いものであるが、できないことを無理にはしない。不爭(争わず)というのは無理をしないことである。人情は高いことを望み低いことを憎むが、水は卑しいところを好んで流れ、行きにくいところへは行かない。行ける方に行くのである。ゆえに聖人のやり方に似て道に近い。

居は地を善くし、心は淵を善くし、與(与)えるは仁を善くし、言は信を善くす。

これより以下は上善のやり方を説いている。地は場所のこと。人は身の置き所が第一である。自分の勝手がよくて人の邪魔にならないところを選んで居る。これが居は地を善くすの意味することである。善くすというのは、上手に都合よくすることである。

淵は深くして底が見えない。人の心も底を見られないのがよい。しかし、底意の知れぬ気味悪い人と言われるのは不調法である。人にも知られずかつ気味悪がられぬようにする、これが心は淵を善くすである。

人にものを与えるのも、与え方が下手だったら格別ありがたいとは思わない。又、傍から偽善家と謗られたりする。そこを考えて具合よく与える。これが與(与)えるは仁を善くすである。

信も「尾生の信」のような、女と橋の下で会う約束をしたが女は来ず、大雨で増水したにも関わらず待ち続けて溺死したような愚直の信はダメ。嘘を言わず身のためにもよいように言う、これが言は信を善くすである。

政は治を善くし、事は能を善くし、動くは時を善くす。

民衆を治めるにも、有為なことをすれば治めようとして却って乱を招く。無為にして人の気に逆らわないように治める。これが政は治を善くすである。

能は才能のこと。才能ある者は事に使われるものである。事によれば使われ過ぎて身の迷惑になる。十分事が整いかつ身の迷惑にならないようにする、これが事は

能を善くすである。

身を動かすに当っては、時節を以てしなければ人の妨げになる。たとえば芝居の中にいる者が、幕を引いている間にトイレにいけば、見物人の妨げにならないようなもの。これを**動くは時を善くす**という。

それ争わず。故に尤(咎)なし。

これは前の七つの喩えを一つにくるめて言ったのである。事は七箇条であるが、そのやり方を一口で言えば、**不争**の二字に帰着する。善事をする必要があるときはやり、する必要が無いときはやらない。それゆえ咎めは無い。人のためにもなるし自分のためにもなる。これを**上善は水の若し**と言うのである。

「老子」の主旨は、世上に善を為して身に禍を招く者が多いがこれは善のやり方が悪いからだ、ただ水が低い方に流れるように、行けないところには行かず出来ることだけしていれば人のためにも自分のためにもなって、上善といえるので、そのやり方は七箇条の如くやれ、というのである。特にこの中で**居は地を善くす**ということが一番肝心であるから最初に置いたのである。

そもそも賢人君子が身を滅ぼすに至るのは、自分自身も好むわけではないが、難しい瀬に乗りかかって、善人になるか悪人になるか二つに一つの手詰まりとなる。だから無闇に命を棄てて悪人にならぬようにすべきである。又、そのとき命を惜しんで一生の善行を無にする輩も多い。これ皆身の置き所が悪いのである。上善をする者は、最初に身の置き所を選んで、善人にも悪人にもなるに及ばぬところにいるのである。その上で善を為すべきとき至れば出て善を為し、出来ぬときはいつまでもしないでいる。だから善を為せば人のためにも自分のためにもなるのである。しないからとて悪人にはなら無い。これが上善をするやり方なのである。

4. <三十輻一轂章(上篇第十一章)>

三十輻、一轂(いっこく)を共にす。その無に当りて車の用あり。

この章は、無の妙用を明らかにしたものである。輻とは、車の轂(こしき)から車輪に放出している「棒 = や」のことである。輪一つにつき三十本あり、それが中の轂というものに挟んである。轂の中には空虚な部分があり、それでよく車が回るのである。轂のこの空虚な部分が一番肝要なところである。又、三十本の輻も同様に、何も無い空虚のところが用に立つのである。(無用の用)

埴(ち)を延(打)ちて以て器を為(作)る。その無に当りて器の用あり。戸牖(こよう=窓)を穿(うが)ちて以て室を為る。その無に当りて室の用あり。故に有の以て利を為すは、無の以て用を為せばなり。

埴(ち)とは粘土のことである。焼き物にする土のこと。延(打)ちは調合すること。すなわち、粘土をこね合わせ茶碗やその他の器物を作る。器物の役立つところは、器の中の空虚な部分が役立つのである。茶碗の細工は色々妙なるものがあるが、結局何も無いところが役立つのである。湯茶を盛るにせよ物を入れるにせよ、つまるところ、この空虚なる部分が役に立つのである。

牖(窓)を開けるにも細工の仕方は様々あるが、結局は窓の何も無いところがあるから、その間からお日様や月光が射し込んで、一室を照らすのである。一室の細工の仕方は千差万別であるが、窓の中の空虚な部分が入り用のところなのである。以上「一穀」「器」「窓」などの喩えは、実はその道理は一である。すなわち何事も空虚なところが第一の入り用のところである、と述べているのである。

そういうわけで、三十本の輻が人の利となるのも、器や窓が役に立つのも皆、無というものがあるからである。無が無くては、いかなる立派な細工であっても、一向に役に立たないのである。世間のことも又、これに同じだろう。

三十輻一穀章は第一章の常無欲以てその妙を觀るという言葉詳しく述べたのである。「老子」全篇八十一章ある中で、常無妙を觀るの理は、毎度繰り返しのことを言っている。この章が最も明白であり、卑近な例を以て説明している。世間一般では、ただ有用の役立つことは知っていても、有というものが無があって始めて役に立つのだ、ということ、又用をなしても無の功が最も上位に居ることに気が付いていないのである。それゆえに丁寧反復してそれを述べているのである。

有無ということが「老子」第一の要義である。易に陰陽ある如し。(中略)天地が位を得、日月の運行、風雷の変化等は、総て空気があってその間に行われる。空気が無ければ万物は壊れるのである。人は一日二食食べなくても死なないが、空気無くしては忽ち死んでしまう。すなわち万物は無によって生活せざるを得ないのである。

さて、無を離れるのと離れないとの差は動と静による。静ならば離れがたく、動けば離れ易い。これが虚静を貴ぶ所以である。まずこの大意を知って、無の妙要が万物の上にあることを知るべきである。造化はすなわち無である。これは眼前の理であって、人が知っていることだが、人は却ってこれを疎かにしている。(中略)

無ということを人の行いに例をとってみよう。「論語」に「君子は器ならず」(為政篇)とある。これすなわち無である。聖天子である舜は、十六名の大臣を起用して、己を恭しくして南面するだけだった。('論語'衛霊公篇)したがって古人は「老子」を称して、南面の術だと言った。だが「老子」の本意とするところは、万事につけて自分は無のところに居り、他人を有のところに用いることであった。

尚、有無の二字について、後世に種々の論議が盛んだが、「老子」の趣旨は、形あるものを有、形無きものを無と言っただけのことだ。ただその無中に有があり、虚中に実があり、退中に進があり、静中に動があるのである。「史記」老子列伝に、孔子も変幻自在の老子を、まるで龍の如き者だと嘆じたものである。

5. <古之善為士者章(第十五章)>

古の善く士たる者は、微妙玄通、深くして識るべからず。それただ識るべからず。故に強いて之が容(かたち)を為す。

この章は、「史記」(老子・韓非子列伝)で、老子が孔子に「君子は盛んな徳があっても、容貌は愚者に似る」と言った記事があるが、その「愚なるが如し」を形容したものである。古の善き士は、その人となりがなかなか外目にはわからない。それゆえに何とも形容しがたい。そこで、これから述べるところは、強いてこれを形容してみようというのである。微妙というのは、微にして見難き事。玄通というのは、抜け通って障り我無いこと。これは本当に愚かなわけではない。ただ外からは知り難いので自然と愚人のように見えるだけ。

豫(よ)として冬、川を渉るが若(ごと)し。猶(ゆう)として四鄰を畏れるが若し。巖としてそれ客の若し。渙(かん)として氷の將に釈(と)けんとするが若し。敦としてそれ樸の若し。曠としてそれ谷の若し。渾としてそれ濁れるが若し。

豫は猶予すなわちぐずぐずして決めかねることである。寒中衣を脱いで川を渉るときは、寒さを畏れる、誰もうじうじするものだ。万事につきためらって埒のあかない様子、それによく似ている。

猶も猶予のこと。これも諸事ためらって、ああしようかこうしようか、前の人がなんとかせぬか、このように言ったら後の人がどう言うだろうかなど気遣って、物事の埒が明かない様子。

巖は巖格な様をいう。人の中に出ても木人形のように笑いもせず、語りもせず、ただ客人のように構えている。

渙は氷の半ばは解け、半ばは解けないような状態をいい、時には言うときもあるが、ハキとは言わない。

敦は厚いこと。樸は荒削りのこと。すなわち荒削りで飾り付けが全くない。

曠は空虚のこと。谷の中の空虚であって、一物も無きが如し。

渾は濁ること。水をかき混ぜてそこが濁ったように、何か一物あるような無いような。

孰(誰)か能く濁りて以てこれを静かにして徐(おもむろ)に清からん。孰(誰)か能く安んじて以てこれを久くして徐(おもむろ)に生ぜん。

この一節は、上の濁るが如しという語をうけて、その濁るについて一趣向あることを明らかにしたのである。始めの句の尻を取ってそれより趣向を出す。これが「老子」の文法である。

さて濁るようにすることは、おいおいこれを澄まそうとするためである。急に澄まそうとしたら事を破る。だから自然と澄むようにすべきである。又ものを急にでかそうとすればよくない。ただ安寧にして自然に生ずるのを待つ方がよい。これが古人が濁るように見える所以である。たとえばすぐ疑わないことが親切であることを話してみよう。

自分の同部屋の相手が金を失くして疑われたとしよう。自分には非はないが疑われてしまった場合、少しも弁解せず疑われたままにしておく。そのうち真実がわかり相手が大いに謝ることになるだろう。もしそのときにいくら弁解しても、事が明白になるまでは疑いは晴れず、却っておかしなことになってしまっただろう。このように盗人という名を蒙りながらもその分に居ることがすなわち濁である。

そして「安んじて以てこれを久くす」とは、同じ例でいえば、疑い晴れていい奴だと評判が立ち、後に立身を遂げる。すなわちその福録は辛抱強いところから徐々に生じたのである。

この道を保つ者は盈つるを欲せず。それただ盈たず。故に弊(やぶ)れても新たに成さず。

以上のように容貌愚なるが如く見えるのは、畢竟のところ盈満を嫌うのである。内すでに聡明かつ外も聡明に見えるというのは盈満である。これじゃあ神怒り人も恨んでついに禍に罹る。だから内聡明な者は外を愚鈍に見えるのが調合宜しいのである。満ちることがなければ欠けることも無い。よって身家も安泰だ。

弊(やぶ)れても新たに成さずというのは、古いものが相続して変わらないこと。だから新たになるということはない。もとのままで済むというわけである。

6. <致虚極章(上篇第十六章)>

虚を致すことを極め、静を守るを篤くす。万物並び作(興)れども吾れ以てその復を觀る。

この章は、人君の道を明らかにする。虚は実の反対で何も無いことである。「虚を致すことを極め」とは、人君たる者はその心を空虚にして、善をも思わず悪をも思わないように極々致し極むべしというのである。静は動の反対で、動かないことである。こ

れは、その身を静にして善事をも悪事をもせぬというところを、手厚く守るべしというのである。「虚を致す」は無心のこと、「静を守る」は無為のこと。人君は、内心無心にして外無為というところを手堅く心得よ、と言っているのである。

万物は万人のこと。作とは事を思い立つこと。以てとは、虚と静との二つを以てするのである。復とは思い立つことをやめてその前に返ること。すなわち、万人競って事を思い立ち、色々挑むけれど、いつまでも虚静を守っている。そうすれば彼も又自然と思い立つことをやめて、本の無事に返るのである。観るとは、観て待っているの意である。

それ物は芸芸(うんうん)すれど、各々その根に帰す。根に帰るを静といい、静を命に復するといい、命に復するを常という。

芸芸は多き様をいう。万物の動き出したときは、芸芸として多い状態であるが、暫くすればその本に立ち返って静まるものである。たとえば夏に百虫皆外に出て動いているが、秋冬になれば蟄居して穴に入るようなもの。人も種々の事を思い立つ者がいるが、上が取り上げずにおれば自然と休んで本に返るのである。

万物根に返れば静になる。静になれば天命の本に返る道理である。天命に返れば平常にして易割らない。この三句はだいたい同じ意味である。万物は静なるを根本とし、天命の常とす。動くは変化であって常ではない。

常を知るを明という。常を知らざれば妄りに作(な)して凶なり。

万物皆静なるを常とし、動くを変となす。静なることが常であると知って、人は動いても自分は動かず、人の静かになることを待つ。これがものの理数に明らかであるということである。もし静なることが常であるということを知らなければ、人が動けば自分も又動く。理を知らずして動くのは妄りに動くことで、必ず禍凶を招くのである。

常を知れば容(入)る。容るればすなわち公なり。公なればすなわち王なり。王なればすなわち天なり。天なればすなわち道なり。道なればすなわち久し。身を滅するまで殆(危)うからず。

常を知って静を守る人は、他人から如何なることを仕掛けられても、争い拒むことなくして、黙してこれを容れる。なぜかといえば、相手の人もおいおい静まるということを知っているからだ。このようにその心に私心が無いから公というところに適うのである。これすなわち帝王が天下を兼ね蓄える度量である。又、万物を容れる理にも適うのである。天に適えば道にも適う。道は天地を生ずるものである。道に適えば永久不滅である。人がよのところをよく知れば、生涯危うきことは無い。以下漢の文帝の例を挙げてみる。

文帝の時、千里の馬を献じた者があった。文帝がこれを無用のものなりとして受けなかった。これより物を献じて上に媚を求めることが無くなった。

つまらぬ官吏が弁舌たくましくして文帝のお機嫌伺いをして帝の賛意を得ようとしたが、少しも褒められなかった。これよりおべっかつかいが無くなった。

呉王が文帝に対し謀反の志があって、入朝しなかったのを咎めず、却って几丈を賜ったので謀反は止んだ。

張武が賄賂を受けていたことを咎めず、文帝が却って金銭を賜ったので自然と賄賂が止んだ。

これらを見るに、賞すべくして必ずしも賞せず、罰すべくして必ずしも罰せず、ただ虚静にして人の心を静めたのである。これは文帝が「老子」を好んだからできたことであるが、このことは人君に限ったことではない。たとえば酔っ払いがいたとして、自分に種々の無礼をはたらいたとしても、自分から相手にならなければ自然と静まるものだ。これが「**静虚にして復を觀る**」の理である。もし酔っ払いを相手にして争論に及んだなら、「**常を知らざれば妄りに作(な)して凶なり**」というものになる。これは凡人と雖も気が付くことである。達人からみれば、世上有為の人は皆酔っ払いの如し。我が心を動かして相手になるのは愚の至りと思うことである。

ある禅師が山中に庵を結んだところ、魑魅魍魎多く、種々の恐ろしいことをなして、禅師を脅した。しかし禅師が悠然としておったら、いつしか鬼魅が自ずから退散して障害を為すことがなかった。ある人が禅師に「如何なる術を用いて鬼神を退治したもうたか」と問うと、禅師曰く「別に術はない。ただ空を以てするのみ。山鬼の技量は尽きることがあっても、わしの一空は尽きることなし」と。禅師の空は、すなわち「老子」の「**虚静復を觀る**」の義である。

7. 希言自然章(上篇第二十三章)

希言は自然なり。

この章は、やむを得ずして虐乱の朝廷に立つ時の心得を言う。希言とは、言が希(まれ)であること。乱朝に立って多言なるは禍を招く道である。ただ言葉少なくしておれば、自然とことの落ち着きがある。多言にして急にことをしようとすれば、必ず誤まる。自然の成り行きに任せるのがよい。

飄風(ひょうふう)は朝を終えず。驟雨(しゅうう)は日を終えず。孰(た)れかこれを為すものぞ。天地なり。天地すら猶久しきこと能わず。而るを況や人に於いてをや。

自然の成り行きとは、たとえば飄風(ひょうふう)は竜巻風で、驟雨(しゅうう)は夕立雨だ。この二つは、勢いの激しいものである。その起こったときは天地も震動するほどである。しかし一朝か一日の内には鎮まるものだ。総て常理に反したことは、久しく続かぬものである。況や人がすることに於いてをや。謀乱の行いを為すものは、久しからずして自滅する。

故に道に従事する者は、道ある者には道に同じくし、徳ある者には徳に同じくし、失ある者には失を同じくす。道に同じくすれば、道ある者もまたこれを得ることを楽しむ。徳に同じくすれば、徳ある者もまたこれを得ることを楽しむ。失に同じくすれば、失ある者もまたこれを得ることを楽しむ。

それゆえ、道を守る者は、強いて上のやり方に逆らうことをしない。上たる人が道徳に叶うことをすれば、それと同意するのは勿論だ。道徳を失っていることがあっても、先ず同意の形をする。しかし、悪事の繁盛する勢いはあたかも飄風驟雨の如くに暫時に止むのだ。その時始めて強いて諫言しなかったことを人皆合点するのである。

信足らざれば、信ぜざることあり。

上のことは、結局その人に忠信の意を満足するゆえに、傍から見ると、彼はおべっかを使って身を立てるとは思わない。もし、自分の信が足らずして濁乱の朝廷に立ち、信がなければ、どれほど多言にして申し訳をなそうとも人は承知しない。(信は重要な徳である)

この章の主意は、唐の仁傑のことを例に引けばよく通じるだろう。仁傑は一生則天武后に仕えた人である。則天武后は淫乱の女性で、唐の社稷を覆し、国号を周と改めて李姓を武姓に変えるに至った。時の勢い如何ともすべからず、仁傑は則天武后に仕え宰相となり、意見が取り入れられ謀が用いられた。しかし唐室を再興したい意志はあったがそれを果たさずして没した。

その後、仁傑が推薦した諸臣が、則天武后の老病のときを伺って、これを廃立し、唐室を再興した。後世、仁傑を唐の忠臣と称し、誰も文句を言うものはいなかった。もし他の人物ならどうして後世の謗りをまぬかれなかったであろうか。これを以て君子の道は、忠信を尊んで多言でないことを知ることだ。凡そ大臣或は賢人などで、乱朝に立って、忠直の道が足りなくて諫言すべきことを黙する人が多い。よくこの意味を知って、妄りに批判を加えてはいけない人たちである。(真っ直ぐに諫言すればよいというものではない)

8. 将欲噏之章(上篇三十六章)

将にこれを噏(縮)めんと欲すれば、必ず固くこれを張る。

この章は、暴国悪人を平らげようと思うときのやり方を言ったものである。この二句は、弓のことに喩えている。噏は緩むこと。強弓があって、少しこれを緩めようと思ったら、常々張りつめて置くことだ。そうすれば自然と緩むようになる。人事を以て言えば、越王勾践が呉に仕えたとき、呉が斉を討とうとした。勾践は加勢の兵を差し向け、共に討ち破り、その上で呉の疲れたところを襲ってこれを破った。すなわち、一旦斉に勝たせてその勢いを張り、そして後に打ち勝ってこれを緩めたのである。「必ず固く」とは、向こうから望まずとも、こちらからは是非ともその通りにすべし、という意味である。

将にこれを弱めんと欲すれば、必ず固くこれを強くす。

相手が勢い強ければ、更に強がらせておいて、その上で弱めるべし、と言うのだ。たとえば、趙の李牧が北辺を守るとき、匈奴が来襲しても敢えて戦わず、専ら柔弱の体を示しておき、相手を奢らせて、その上で大いに打破したようなものである。

将にこれを廃せんと欲すれば、必ず固くこれを興す。これを微明と謂う。

廃は横に倒す心。相手を倒そうと思うなら、一旦わざとこれを立てておいて、その上で倒すべし、と言っているのだ。晉の桓玄が帝位を奪おうとしたときに、その一族からそのことを劉裕に問うたら、劉裕はこれを勧めた。桓玄がすでに帝位を窺う段になったとき、劉裕が兵を起こしてこれを討ち滅ぼした。これは、桓玄が帝位を窺うときは、その悪がすでに満ちて、滅ぼしやすいことを知っていたからである。

「これを微明と謂う」の微はかすか、明は光のことで、敵を滅ぼそうとして思う本意を包み隠して表さないところを、「光が微かにする」、と言ったのである。

柔は剛に勝ち、弱は強に勝つ。魚は淵より脱せしむべからず。国の利器は以て人に示すべからず。

前述したところは、柔を以て剛に勝ち、弱を以て強に勝つ方法である。なぜ柔弱を以てするかというと、その訳は、たとえば魚は淵の深いところにいて姿を人に見せぬようにするがよい。もし淵から抜けて浅いところにきて姿を見られたら人に捕まってしまう。又、国にも利器というものがある。利器とは刃のことで、人を殺す道具である。この利器はやはり魚の如くその在処を人に知らせてはいけない。人に知らせてしまうと人がこれを奪い取って、却って自分を殺すに至る。信長が明智を殺す意があったの

を、明智がこれを察して却って信長を殺した類がこれに当る。故に利器を人に見せないやり方が、微明の術である。

この章の主意は、「老子」平生無為にして天下の先とならず。故に悪人暴国を退治するにも、ことさら手を下さず、相手の自滅するのを待つのである。後世の人が、この章を「陰謀の言なり」と言うのは間違っている。「老子」の本意は、なるべく人にも自分にも疵がつかないようにして取り治めよう、と思うからこそこの工夫に及んだのである。孔子が弟子の子路の暴虎馮河ぶりを嗜めて、「事に臨みて懼れ、謀を好みて為す(述而第七の十)」者と組んで大事を進めたい、と言ったのにも叶っているのである。

伯夷が武王に紂王を討伐するのを諫めたのもこの意で、紂王が自滅するまで待ったなら、刃に血を濡らさずして天下は治まると思ったからだ。武王がこれに従わなかったので、牧野の戦いに多数の流血を見るに至ってしまった。先儒が伯夷を老子に似ていると言ったのもこの辺の事情からだろう。

総じて老子の学は、虚から実が生じ、無から有を生じ、柔を以て剛に勝ち、弱を以て強に勝つを主意としている。八十一章総てそうだ。人、虚無ということを解し違え、一概にその心を死灰にし、その形を喬木にすることのみ心得ているから、この章に至って疑いを生じるのである。

9・聖人無常心章(下篇第四十九章)

聖人は常の心無し。百姓の心を以て心となす。

常心とは、定まった心をいう。これは好む、これは惡むという定まったことが無く、天下の人の好むところを好み、惡むことを惡む。これが**百姓の心を以て心となす**という意味である。

善者は吾れこれを善とす。不善者は吾れ亦たこれを善とし、善を得しむなり。

これより以下は、**百姓の心を以て心となす**ところを言っているのである。善者がいて善事を為せば、吾れこれを善とするのは勿論である。不善者がいて吾れに向かって惡事を為すときは、吾れ又これを拒まずにやはり善者同様のあしらいをする。このようにすれば、後には不善者も恥入って、惡をしないようになる。これが不善者をして善を得しめることである。善不善を選ばず同じあしらいにすること、それが**常の心無し**の意味するところである。

信なる者は吾れこれを信とし、不信なる者も吾れ亦たこれを信とし、信を得しむるなり。

これも前と同じ道理で、信者を信とするのは当然である。不信者がいて吾れを欺く時、やはりこれを信にして引き受けるのである。このようにすれば気の毒に思い、後には嘘を言わないようになる。かくして不信者をして信を得しめるのである。

聖人の天下にあるや、惛惛(ちょうちょう)として天下の為に心を渾(濁)す。

惛惛(ちょうちょう)といは落ち着かぬさま。心を渾(濁)すとは善悪・信不信を差別なきように一つに混合することである。もし差別の心ありはしないかと、氣遣っているところを形容して惛惛(ちょうちょう)と言ったのである。

百姓は皆なその耳目を注ぐ。聖人は皆なこれを孩(がい)にす。

百姓は皆なおれは善を為した、悪をした、信を守った、嘘を言ったなどと、お上から褒美や爵位をもらうために、耳を付けて上の言を聞き、目を付けて上の所作を見る。しかし、聖人の心は皆なこれを赤子のようにしてあしらう。赤子のすることには、善悪もなければ信偽もないので、ただ一様にあしらってこれを育てるだけである。

この章の主意は、国を治めるにあたって、善悪信偽を詳しく差別すれば、限りなく煩雑になるから、大抵にしておくがよい、ということである。このような考えは、人は疑うだろう。悪をも善とし、偽をも信としてこれをあしらっても、もしその者が改めなければどうしようもないじゃないか、と思うだろうから。

しかし、それは物事の数(すう)ということに暗いからである。人の悪事は、禁制したところで、する奴はするものである。又、禁制せずとも止むときは止む。たとえば商人が物を売るには始めから値段を決めて債権をとる。しかし時には代金が滞り、損失を招くことがある。医師が薬を施すときは代金を論じない。謝礼を持ってくるときも、多きも少なきも同じ挨拶で受け取ってしまう。そうならば一向に謝礼を持ってこぬ者が増えて医師の商売が成り立たぬ筈だがそうなってはいない。

買い物で価格を払う者も、医師に謝礼を贈る者も、同じ人なのに相手のあしらいが違えばこちらのやり方も又異なるのである。これを以て国を治める者が、善悪を差別し賞罰を明らかにするのは、第一義のことではない、と知るべきである。

10・天下有始章(下篇第五十二章)

天下に始め有り。以て天下の母と為る。

この章は、首章の無名は天地の始め、有名は万物の母ということを重ねて言った

のである。始めとは無のことで、一切の有を生じる。これすなわち**天下の母**である。

既にその母を知れば、以てその子を知る。既にその子を知って、復(ま)たその母を守れば、身を没するまで殆(危)うからず。

道を学ぶ者は、先ず無ということが大切なことを知り、これを手に入れるようにする。そうすれば、一切の有は皆な無の子となることを知るのである。その上で、有に流れず本の無に立ち返って、これを守るのを善とする。このようであれば、終身危うきことはないのである。たとえば樹木の根と枝葉とあるとしよう。枝葉は根から生ずるということを知れば、専ら根を培うであろう。そうすれば枝葉はそれに従って繁栄するようなものである。

その兌(だ)を塞ぎ、その門を閉ずれば終身勤せず。その兌(だ)を開き、その事を済(な)せば、終身救われず。

これは「子を知って母を守る」やり方を説明したものである。兌(だ)とは口のこと。「口を塞ぐ」というのは口を塞いでものを言わないこと。いわゆる「不言の教え」である。門は事の出るところ。門を閉じるとは、事を閉じて何もしないこと、いわゆる「無為」のことである。このようにすれば安楽無事になって、終身勤勞することはない。これすなわち無を守るのである。もしそうしないで、「口を開き」その事を済(な)せば、多言にして有為のために、事から又事が生じ、終身勞苦に陥って救うことが出来ない、と言っているのである。

小を見るを明といい、柔を守るを強という。その光を用いてその明に復歸すれば、身の殃(わざわい)を遺(残)すことなし。これを襲常という。

これは兌(だ)を塞ぎ、その門を閉ずるやり方を示したのである。およそ如何なる大事も、その始めは皆な無事である。小なる時に早くその手当てをして、大事に至らぬようにする、これが未然防止の法で知の明らかなところである。又、堪忍を第一にして、人から無理を仕掛けられたとしても、立腹せず従順にしているときは、事は起こらないものである。その堪忍強いところが、真の強さというのである。小を見るの明と柔を守るの強とを以てするとき、事の起こるべきところも無事に済むのである。

光と明とは、知を形容した言葉である。光は外に輝くところで、知の用である。明は内に明らかなところで知の体である。道を知る人は、知を外に顯さずして内に隠す。内は本であるゆえ、復歸と言ったのである。これすなわち子を知り母を知るの義である。このようであれば終身危うからずして殃禍を残すことはない。襲は包み隠す意。常久の道を身に蔵するから、一切の危難を免れるのである。

「子を知り母を知る」ということを例示すれば、上古の時代には刑罰ということが無かった。人の子を殺せば人又その子を殺す。人の妻を奪えば人又その妻を奪う。何事も相対に済ますものだ。これが刑罰の本であって、すなわち母である。聖人が出るに及び、初めて五刑の法が出来た。一切の事が相対に済ますことを禁じ、上からの裁断に任せた。これが相対の反報からでたことだから、すなわち子である。国を治める人が、上古には刑罰なくして治まったということを知れば、刑罰をもあまり煩雑にすることなくして、下から訴え出たことはこれを裁き、内済ましするときは、大抵のことは知らぬ顔にして過ごすのである。それを「子を知って母を守る」というのである。

もし母を守るの義に暗いときは、下は内済まししようとしても、それにては上の法度が立たぬということになって、少しのことにも穿鑿が厳しくなり、後は秦の国でやった苛酷な法と同様になってゆくのである。始皇帝は早朝から夜中まで政事を裁いて事済まず、稟議書を秤にかけて、一日何斤と決めて事を決したそうである。これが**その兌(だ)を開き、その事を済(な)せば、終身救われず**というものだ。

他の事もこれに準じて知ることだ。昔は葬祭ということは無く、死者は野に棄てた。一変してこれを地に埋め、棺を作り、明器を作った。その後段々美麗を極め、穴の中に城郭宮室を構え、数百人を殉葬するに至った。秦の乱などは、始皇帝の墓所の公役が多かったために生じたといってよい。又、三千の宮女は婚姻して子孫相続に始まったものだ。何事も母を忘れて子を守り、本を棄てて末に奔ることから奢侈に流れ、煩雑になって、終に天下の困窮となったのである。この章の主旨には深いものがある。

11・以正治国章(下篇第五十七章)

正を以て国を治め、奇を以て兵を用い、無事を以て天下を取る。

国を治めるには、正を以てし、奇を以てせず。兵を用いるには、奇を以てして、正を以てせず。この二句は、物事各々その宜しきところあるを言っている。天下を取るに至っては、無事を以てすべくして、多事を以てすべからず。これがその宜しきところである。初めの二句は古今の通例として人々が遍く知るところである。無事の一句は知らないところである。したがって人が遍く知るところを引用して、その知らざるところを諭したのである。「老子」の主意は、まったく後者の一句にあるのである。この**取る**というのは、攻め取り奪うのではない。ただ人の心をこちらに懐けて、思う通り治めることをいう。

吾何を以てその然るを知るや。これを以てなり。

この句は、無事を以ての一句を受けて言うのである。天下を治めるには、無事でなければできないというのは、このわけを以てである。これとは、以下に言う四ヶ条を指す。

それ天下忌諱(きき)多くして民、彌(いよいよ)貧し。

これより以下は、多事の悪いことを挙げたのである。忌諱(きき)とは、忌み嫌うこと。方角時日などの吉凶を詳らかにすることをいう。不吉を忌み嫌い、これを避けるのは福を得んがためであるのに、却って貧乏になるのである。一例を挙げれば、家相を論ずる者は、ありきたりの家を壊して建て替えることがある。その出費が生活に障る。これは福を得ようとして却って財を損ねることに陥る例である。

人、利器多くして、国家滋(益々)昏(くら)し。

利器とは便利な道具のこと。昏とは、ものが分からなくなって、暗闇になるということ。たとえば、轎(きょう＝車)というものは便利なものである。これが広まれば武士なども馬に乗ることをやめて轎に乗るようになる。そうすると馬術は廃り、国の武備が昏くってしまう。

民、技巧多くして、奇物滋(益々)起こる。

技巧とは、細工をよくすること。奇物とは、正しくないもののこと。たとえば、細工を上手にする者が多ければ、贋金・偽札などを自由にこしらえるようになる。これが奇物滋(益々)起こるということである。

法令滋(益々)彰かにして、盜賊多くあり。

法令は悪を禁じるためにあるもので、それを明白にしたら盜賊など絶えるはずなのに、却って多くなる。たとえば、博打の制度を厳しく取り締まれば、今まで博打をしていた者は、渡世の仕方が無く、皆な盜賊になってしまうのである。以上の四ヶ条は、皆な国を治める者が、善しと思って始めたことであるが、却って害になることもある。これで多事は無事に如かずということを知るべきである。

故に聖人は云う。無為にして民、自ずから化し、我、静を好んで民、自ずから正しく、我、無事にして民、自ずから富み、我、無欲にして民、自ずから撲(質朴)なり、と。

これは無事を以て天下を取るということを、古聖人の言を引用して証拠としたのである。聖人とは黄帝などの類であろう。下の四句はおおよそ同意である。大意は、上たる者は、ただ無事にしておれば、自然に治まるということを明らかにしたのである。天下を治めるに無事を以てする、は「老子」の常言であるが、この章は、四ヶ条のことを挙げたところが主意である。このことは眼前にあることで、常人も気付くことである。それを挙げて、無事の貴いことを知らせたのである。

12・其政悶々章(下篇第五十八章)

その政、悶々たれば、その民は醇々たり。その政、察々たれば、その民缺々(けつけつ)たり。

悶々とは、黒白のはっきりしない様子。醇々とは、厚いこと。察々とは、黒白が明白なこと。缺々とは、欠けて足りない様子のこと。すなわち、政治のやり方は、はっきりしないようでは悪い筈なのに民風は却って情厚くあり、政治が捌け過ぎた方が善いように思えるが、事多くなり、却って民衆は忙しく手不足になる。

禍は福の倚るところ。福は禍の伏すところ。孰れかその極を知らんや。それ正無きか。

この四句は、悶々が察々に優れていることを言おうと、禍福の上でその理を論じたものである。禍は福の倚るところとは、禍は人の嫌うところであるが、却って福はそれに寄りかかっているもの。たとえば、越王勾践の会稽における苦しみは、禍であったが、それから憤激して覇業をなすに至った。又、福は人が好むものだが、その中に禍が伏し隠れているものだ。

たとえば、呉王夫差が勾践に勝ったのは福であったが、それから驕慢を生じて遂に滅亡した。極とは、動かぬこと。正とは、定まること。いずれ定まることは無いだろうということ。四句の大意は、禍福は定まらぬものである。悶々たる者は格別に福を求めず、禍を避けることも少ない。それが却って仕損じることが少ない。察々たる者は、禍を避けて福を求めることを専一にするために、仕過ごし過ぎて却って宜しくない、ということ。

正も復た奇となり、善も妖となる。民の迷えること、その日固より已に久し。

この四句は、善惡の定まらないことを言っている。もと正しいと思ってしたことが、却って奇となる。奇とは正しくないこと。もと善と思ってしたことが、却って妖となる。妖も奇異にして悪いこと。たとえば、先述したように、法令を正しくするのは正であり、善で

ある。それより盗賊を生ずるのは奇であり妖である。銀札を作るのは民を利するためであって、正であり、善である。しかし偽札が横行し、又は国に正銭が少なくなるのは奇であり妖である。民が善いことをしようと思ってしたが、変じて悪いことになるから、いずれに向かって行えばよいか方角に迷うことが久しい。

これを以て聖人は方にして割っせず。廉にして劓(けい)せず。直にして肆(し)ならず。光ありて輝かせず。

聖人が事を行うに当っては、方すなわち四角ではあるが、刀で切ったように四角過ぎない。廉は角菱のあること。劓(けい)は破り傷つけること。角菱はあっても、それに触れて傷つくほどでもない。肆(し)は伸びること。真っ直ぐではあるが、竹竿などのように、向こうへ伸ばせば物を突くというようではない。光はあるが、行灯の中の火のようなもので、外に蔽いがあるから、輝きすぎて他人がまばゆい感じは無い。

方にして割っせず以下は、皆な一意である。禍福邪正は定まりないものであるが、まったくそれを分けないわけにはいかないのが、方、廉、直、光と言い、いかにも禍は禍、福は福、正は正、邪は邪と理の当然を以て、裁きをつけたのである。

割っせず、劓(けい)せず、肆(し)ならず、輝かせずとは、福の中に禍があり、正に邪があることを知っているゆえに、格別に裁きをつけ過ぎず、物事七八分にしておいたのである。このようなやり方は、傍からみれば、行き届かぬように見える。すなわち悶々である。それが実は政事の上手なやり方なのである。

この章の趣意を医事に譬えて言えば、上手の医者とは、難病を治療する際、あまり劇薬を使わず、又、病を七八分治して悉くは治さない。だから素人からみれば、治療が手ぬるいように見える。しかし、病の悉くは除き難いことを知って、このようにしているのである。これが上手のやり方である。しかるに、未熟な医師は、病の深浅や身体の強弱を顧みず、病とさえいえば、一向にこれを攻めるが故に、或は病癒えて別の病を生じるのである。ここが悶々と察々との違いである。「老子」の言は誠に老巧の言である。未熟者の知るところではない。

13・天下皆謂我章(下篇第六十七章)

天下皆な我を大なれど不肖に似たりと謂う。

天下の人が老子を評して、広大なる人だが不肖に似たりと言う。不肖とは、似ずと訓じ、捉えどころ無く、このようだと物に譬えて言えぬということ。俗にはっとしたる人というようなものだ。

それただ大なり。故に不肖に似たり。もし肖たれば、久しいかなその細たること。

これは老子が人に申し訳をした言葉である。世人の言うことは、大なることは善しと雖も、不肖であるというのが悪いということだろうが、大にあればどうしても不肖に見えるものだ。もし物に譬えて言われるようならば、細かいことになるのだ。

我に三宝あり。持してこれを保つ。一に曰く慈。二に曰く儉。三に曰く敢えて天下の先とならず。

我に三つの宝あり。平生この三つを大切なものとして、取り外さぬようにしているというのである。三宝の第一は慈悲である。慈悲とは、親が子を育てる如く、善人悪人の差別無く、一切これを育てて、疵をつけないようにすることである。二には儉約である。儉約とは、財用に限らない。なるだけ言うことも為すことも少ないのを善しとするのである。三には、人より先に事をせぬことである。何事も人が思い立った上で、それに従って事をするのである。天下とは、一切の人というようなもの。この三つのところから老子の道を学んだら、その方向が分かるだろう。

慈なるが故に能く勇なり。儉なるが故に能く廣なり。敢えて天下の先とならず、故に能く器長を為す。

これ以降は三宝の効能を述べている。慈悲故に強敵にも勝つ。これ勇である。漢の高祖が寛仁を以て項羽の凶暴に勝った例を思え。儉約ある故に施し広く、一切に及ぶのだ。漢の文帝は百金を惜しんで、露台を作らなかったが、天下の民には租税を免除した類である。器長を為すとは、一器量ある者の頭をいう。漢の高祖は、国を治めることは蕭何に委ね、謀略は張良に問い、合戦は韓信に任せて、自己の了見を用いなかった。その類である。

今、慈を捨てて且つ勇、儉を捨てて且つ廣、後たるを捨てて且つ先んずれば死せん。

ここは、三宝を用いない者の害を述べている。且つとは、先ずという心である。慈悲をさしおいて、先ず最初から勇をすれば敗れる。項羽のような者がこれである。儉約をさしおいて、最初から手広くしようとすれば、窮乏に至る。漢の武帝の如きがこれである。人に遅れずして、最初に事をし始めれば亡ぶ。陳勝呉広の如きがこれである。品は変わっても、孰れも死亡を取るやり方である。

それ、慈は以て戦えば則ち勝ち、以て守れば則ち固し。天將にこれを救わんとす。

慈を以てこれを衛(守)ればなり。

ここは、慈の効能を再び繰り返して述べたものである。三宝を残らず言えば煩わしい故、第一のことを挙げて、その他の二つを省略したのである。慈ということは他事には善しと雖も、戦闘上では用い難しと思う人がいる。これはそうではない。以て戦えば則ち勝ちというのは、仁を以て不仁を討つが故に必勝できる。以て守れば則ち固しというのは、我が士卒が皆な仁恩に懐いているため、籠城しても二心なく守るからである。慈を以てこれを衛(守)る者は、たとえ敗北することがっても、大方は天の救いがあるものである。故に滅亡する気遣いはない。

ある人が質問して言った。「老子」は「道の道とすべきは常の道にあらず」と言って、仁義孝悌などの名目を捨てて、専ら無名を説く。しかるに今、三宝の名を立て、人を教えるのは何故か、と。

小生答えて曰く、三宝ということは、実にその名目があるわけではない。唯一個の無の字を形容した言葉とするべし。ただ無を守ってさえいれば、自然と物を損ない、傷つけることがない。そこを慈と言ったのである。無を守れば、多事でなく多欲にならない。従って自然と儉約するようになり、無を守れば事を思い立つこともなく、自然と人の後になる。始めから三か条を立て、これを守るのではない。それなのにこれを持すと言ったのは、人が老子を不肖に似たりと言ったので、止むを得ずしてその方角を知らせたまでのことなのである。読者、辞に拘泥すべからず。

14・善為士者不武章(下篇六十八章)

善く士たる者は武ならず。

この章は、不争の徳を明らかにしたものである。士は武を貴ぶが、善き士になると武猛には見えないのである。韓信が股下をくぐっても、剣を抜かなかったように。

善く戦う者は怒らず。善く戦う者は與(とも)にせず。

戦いは怒りを主とするが、戦い上手はそうではない。司馬仲達が、孔明から婦人用の飾りを贈られて、辱められながらも怒らず戦わなかったように。與(とも)にするというのは、相手になること。梁が趙を囲んだとき、孫子が斉の将となって、趙を救出する際、趙に行かず梁を襲ったら、趙の国が自ずから開放された類である。

善く人を用いる者は、これが下となる。

漢の高祖が「我は蕭何に如かず、韓信に如かず、子房(張良)に如かず」と言って、

三傑を使った例の如し。

これを不爭の徳と謂う。これを人の力を用いると謂う。これを天に配すと謂う。

これとは、以上の四ヶ条を言う。一言で言えば皆な相手と争わずして勝つ法である。又、己の力を用いずして、他人に骨折らせて功を立てるやり方というものである。さらに言えば、天が万物を主宰する妙所に配合しているということに同じである。

古の極なり。

これは、古の聖人の極意秘伝である。ところで、**人の力を用いる**というのは、人を用いることに限らない。合戦のときも、敵から戦いを挑んでも、固く守って戦わなければ、彼(相手)は疲れる。その疲れを打てば勝ちやすい。これすなわち、敵に力を用いさせて、敵に勝つことだから、敵の力を味方に用いる道理である。これが「老子」の秘訣たるところであらう。堯舜がこの秘密を得たので天下は治まった。孔子は憤せずば啓せず、ヒせずば発せずして三千の弟子の才徳を成就したのである。造化はこの秘密を得たために、無為にして四時行われ、百物生じたのである。故に**古の極なり**、と賞賛したのである。

15・出生入死章(下篇第五十章)

生を出でて死に入る。生の徒十に三あり。死の徒十に三あり。民の生、動きて死地にゆくもの、亦た十に三あり。それ何の故ぞ。その生生の厚きを以てなり。

この章は、世人が長生を貪って、却ってその寿命を損していることの惑いを説いている。**生を出でて死に入る**とは、人間の一生の生まれた朝から死の夕べまでを指している。生を出でて死に至るのは誰も一緒なのだが、その中に養生の道理に適った行いの者は、十人のうち三人である。これは悪をしないで不養生を慎むもの達である。長生の道に適っているから**生の徒**である。又、生の欲をほしいままにし、不養生或は悪行をする者が十に三。これは**死の徒**である。又、長生をしようと思い、種々の道を尽くすが、善と思ってやったことが、却って悪となり、養生のつもりが不養生となり、その命を縮める者がいる。これまた十のうち三である。

生生とは、我が身を養うことである。**厚き**とは、念入りが過ぎること。この章の意は、生の徒・死の徒と分けるのは誰も知っていることであるが、ただ**生生厚き**が故に、命を縮めるということは人が気付かないことである。生の徒、死の徒は(この世の)客である。ややもすれば死に行くということがこの章の主意である。

蓋し聞く、善く生を摂する者は、陸行して兕虎(じこ)に遭わず。軍に入りて甲兵を

被らず。兇はその角を投ずるところ無く、虎もその爪を措くところ無く、兵もその刃を容るるところ無し。それ何の故ぞ。その死地無きを以てなり。

我聞くところによれば、上手に養生をする者は、山中に独行しても兇虎(じこ)の如き猛獣に出会っても傷つけられる気遣いはない。又、軍中で矢石の中に入っても傷つけられる心配はない。だから甲兵を避ける用心には及ばぬ、と。

その訳は、兇も角を以て突く場所が無く、虎も爪をうちかけるところ無く、兵も刃を用いるところが無い。それ故何の気遣いにも及ばないのである。

記号同じ肉身なのに、そのようなことに遭う気遣いがいないというのは、何を以て知るか。畢竟、死地というものが無いからである。

死地とは、人の生死は皆な我が身に兼ねて所持している場所がある。生には生の地があり、死には死の地がある。人によって異なるのである。凡そ死ぬ者は、皆な死すべき場所を我が身に蔵しているのだ。だから時節が到来すれば、どうしても死を免れない。生地を所持した者は、死ぬ気遣いはいらぬ。だから危うい場所に臨んでも、気遣うことは無いのである。

たとえば、疫痢が大流行して、十人に八人が死に、二人は何の病がないという場合、八人の者は死地があり、二人は死地が無いからである。凡人の目で見れば、生地・死地は事の事跡から見るのでなければ知り難いが、有道者からは明らかに見えるから、用心するには及ばないのである。

その訳は、生死には「数」というものがあり、数が満ちて死ぬ。有道者は兼ねてより数を見通している。だから死の到来する時節が当分ないだろうことを明らかに悟っているので騒がないのである。

古人の例をとれば、柳下恵が魯にあり、蘧伯玉が衛にあり、晏平仲が齊にあり、季札が呉にあり、張良が漢におるの類である。争奪変化の間におり、衆人皆な危ぶむけれど、己は晏然としているのは、自分に死地というものが無いことを自ら知っているからである。これは衆人の目には分からぬことで、知者独りが知る境地なのである。「老子」の意の深いことよ。

16・治人事天章(下篇第五十九章)

人を治め天に事(つか)うるは嗇(しょく)に如くはなし。

これは、老子の道に一字の秘伝があることを言っている。人を治め天に事(つか)うるとは、帝王の業を指している。帝王の職は、下はか下民を治め、上は上天に事えるこおである。王者の道は、ただ、嗇(しょく)の一字が緊要である。嗇とはすなわち吝嗇(りんしょく=ケチ)のことである。しかし財用のことは主ではない。万事につけ儉嗇で

あることを善とする。事をするにしても、言葉を言うのも、一切のことについてこれを惜しんでしないようにすること、それが齋の理である。

それただ齋、これを以て早く復す。早く復す、これを重ねて積徳と謂う。

齋(しょく)を貴ぶ所以は何か。人は気によって立つものである。草木に根があるようなものである。多事を為す人は、気を労することが強いから、元気は早く衰える。たとえば草木を朝暮に植え替えるようなものである。気と体が離れて枯れてしまう。枯れないまでも傷んでしまう。齋荷していれば元気働かず。一旦気が衰えても、元の通りに復(返)る。故に気が丈夫になって妄りに動かない。

元気が早く復せば、その後気を損することをしない。だから気が段々積み重なる。気とはすなわち徳である。一切の事の基本となる。故にこれを徳と言ったのである。

重ねて徳を積みめば、則ちよくせざることなし。よくせざること無ければ、則ちその極を知ることなし。以て国を有すべし。

よくせざることなしとは、どのようなことに差向けても、少しも退屈することはない。気をよく練った者は暫く食わずとも、餓えることはない。寒中にも衣服の力を借りずに凍えることもなく、或は水火に投じ、兵刃にかかっても又傷つけない。

その極を知ることなしとは、長寿なることを言う。このようであれば、その身を保つばかりでなく、国家も又保つ筈だ。凡そ国家を保つは易く、身を保つは難し。すでに能く長寿無涯ならば、その理を以て家を保つのは一層簡単なことである。

国の母を有すれば、以て長久なるべし。

肉身さえ堅固にして数は百年を経る。況や国家をや。人をして寿ならしむるのは気である。この気というものは一切のものを生じるから、これを母といったのである。身にあっては身を保ち、国にあっては国を保つ。一切の母を我がものにしたのである。

これを深根固抵(しんこんこてい)と謂う。長生久視の道なり。

この齋の字から工夫すれば、気に気が積もって、際限ないことになる。たとえば、金銀を使うこと少なきを増長すれば、その富限りなくなる道理である。深根というのは、草木の根を深く土に埋めておいて動かさぬようなもの。固抵とは、果物の蒂(へた)を固くし、その実を動かさず、烈風にあっても落ちることがないこと。皆な元気の元を深く養うこと。これは元来長生久視の道なり。久視とは、一つのものを終日見つめていても、瞬きしないこと。元気満足する者はかくのごとし。このところは、老子自らが平日に行って覚えのあることである。従って、その道を治国に施すのである。

この章は、老子は養生家で、仙術を行う者の祖となすところである。養生治国は一理である。従って、今、国家を保つ者のために、その法を説き、養生の理を以てこれを治国に施すのである。この嗇という一字は、その義極めて浅くして、平人も修業成就すべきことである。故にこれを釈す。我が国の平日、一のこの字を持するのみ。飯を食うにもこれ、言葉もこれ、一切の作事もこれ、養生も又これだ、と。この字すなわち嗇の義である。

17・天下有道章(下篇第四十六章)

天下道あれば、走馬を卻(退)けて以て糞す。天下道無ければ、戎馬、郊に生ず。

この章は、多欲の害を言っている。天下道あればとは、盟主が上にあって、諸侯が各々その封国を守って動かないときのことである。このようなときは、千里を走る駿馬があってもこれを合戦に用いることが無いから、無用のものである。だから、これを卻(退)けて田に糞す。糞すは養うの意。天下無道にして、諸侯争うときに至っては、郊野にある。農夫の馬でさえこれを引き上げて、戎兵の用にしてしまう。有道か無道かの差別は、ただ自分の分に安んじて無欲であるか、他人の物を我が物にしようと思うかによる。

罪は欲すべきより大なるはなく、禍は足ることを知らざるより大なるはなく、咎は得ることを欲するよりはる大なるはなし。

この文章は上記を受けている。諸侯が他国を征伐する際は、必ず相手の罪を挙げながら征伐する。しかし、その実は罪がある訳ではない。その土地を奪わんがためである。土地というものは、人が欲するものである。他人の土地を所持したいというのがすなわち罪の種なのである。又、他国を侵して軍が敗退し滅亡に至る者がある。これは禍である。咎である。この禍と咎とは、用兵の稚拙さによるものではない。もともと自国を持ちながら、それを不足に思っ、尚も隣国の土地を我が物にしようとした欲心が禍と咎の種なのである。

故に足ることを知るの足るは、常に足る。

以上述べたように、人は足ることを知るに如くはない。人の欲には大小がある。天下を得て足る者、一国を得て足る者、一家で足る者など色々である。これらの人は、皆己の望みがあって、望みが満たなければ不足とする。ただ足るを知る者はそうではない。天子となれば天下を以て足れりとし、士處人となれば一簞の食・一瓢の飲を

以て足れりとする。分に従い、命に安んずれば多きも足り、少なきも足る。これを常に足るという。

韓信や彭越は、謀反の罪で誅されたが、実は謀反の罪は小さく、大国を領有した罪が大なるゆえに殺されたのである。これが**罪は欲すべきより大なるはなく**である。又、韓信が雲夢に虜にされ、長楽に誅された禍は小さい。逃れる方法はあった。始め足ることを知らずして、斉に仮王たらんと欲した禍咎は大きい。この一念が一族を滅亡させる根源であって、救い難いところである。これを**禍は足ることを知らざるより大なるはなく、咎は得ることを欲するよりは**大なるはなし。というのである。

18・吾言甚易知章(下篇第七十章)

吾が言は甚だ知り易く、甚だ行い易し。天下能く知ることなく、能く行うことなし。

この章は、世上の人、老子の道を知る人がいないのを、感嘆して言ったものである。私の言は知り易いの^に知る人なく、行い易いの^に行う人がいない。難しくて知らず、行わずというのなら是非もないが、そうでないのにやらない。

言に宗あり、事に君あり。それただ知ること無し。これを以て我を知らず。

この段は、簡単なのに知る人が少ない所以を言っている。凡そ天下一切の言の中に、宗となる言がある。宗とは本家のことで主となること。一切の中に君となる事がある。その訳を知る者がいない。老子は平日、言の宗を言い、事の君を行う人である。世人、そのところに目をつけず、老子の貴ぶべきことを知らないのである。

言に宗とは何か。「不言の教え」のことだ。**事に君**とは何か。「無為の事」だ。自分のことがあっても言わず、人の言を以て言とする。このようにすれば、天下に言が満ちるが、口の禍は無い。自分のことがあっても為さないで、人のことを以て事とする。かようであれば、行いが天下に満ちても、恨み憎まれることはない。すなわち逸楽あって苦労はない。功があっても禍はない。これを**言の宗、事の君**というのである。

我を知る者は稀なり。則ち我は貴し。これを以て聖人は褐を被(着)て玉を懐く。

人が自分を知らないことは、歎すべきことではあるが、その実は、知る者が少ないというのが貴い道理である。たとえば夜光の珠も、家ごとに所持していたら、石瓦と同然だ。世の中に無いものを自分だけが珍藏しているからこそ貴いのである。このゆえに、古の聖人も**褐を被(着)て玉を懐く**人なのである。**褐**は賤しい者が着るもの。玉は徳に譬えた。**褐を被(着)て玉を懐く**とは、貧賤にいて徳を包み隠していることを言う。

傳説(ふえつ)が土木に人夫となり、太公望が漁師となっていたのがこれである。又、老子が下級役人となったのも又、その言わんとする心である。

19・和大怨章(下篇第七十九章)

大怨を和すれば、必ず余怨あり。いづくんぞ以て善となすべけんや。

この章は、人と和合することを言っている。大怨とは、兼ねてからその人に遺恨があること。遺恨ある者は、他人が中へ入って和睦する。しかし表向きは和合しても、心の恨みは残るものである。これが人情というもの。全くその通りで、和睦も詮方ない。和睦するからには、一向に心に残らないようであるべきである。

これを以て聖人は、左契を執って、しかも人を責めず。

左契とは手形のこと。昔は物の貸し借りするには手形を以て証拠とした。一枚の手形を中で二つに割り、その左を貸主が保管し、右を借り手が保管して証拠とした。これは商売上の通例である。左を取ってさえおけば、いつでも催促してこれを取っても、相手から申し分できないのである。然るに聖人は、その左契を所持しただけで、用立てることはない。相手先が損をかけたとしても、それを寛恕して責めることをしない。聖人のやり方は万事がその通りで、こちらが否応のない理屈があってもそれを言い立てることをしない。相手方の無理な願いをもその通りにしておくのである。だから遺恨が残ることもない。

有徳は契を司り、無徳は徹を司る。

徹とは証文の表のこと。これを見せれば理が当然で、裁きは明瞭につく。契を用立てるか否かは、その人の徳義による。徳ある者は、契をしておいて用に立てない。これが有徳は契を司りである。徳無き者は、それを取り出して、是非とも証文の表によって取り計らう。これが無徳は徹を司るである。

天道は親なし。常に善人に與(くみ)す。

以上のようなことから、徳ある者は証文を用立てない。終始身の損をするだけだ。しかし、「このような善人にあっては、天道が味方をするので、運極まりて行き倒れするということはない。天は万物の命を制するもの、天道よりご覧じて、その善人たるを推察されるので、万事について天の助けがある。それゆえ気遣う必要はない。

この章の主意は、物事を刻薄にするのは利勝手にようだが、実は然らず。寛恕するほど却って運に適うのである。平人の身の上に、このような類が極めて多い。聖人は万事においてこれを用いるので、なおさらその功德が大なることになる。

20・小国寡民章(下篇八十章)

小国寡民。人に什佰(じゅうはく)するの器ありて、用いざらしむ。民をして死を重んじ、遠く徙(うつ)らざらしむ。

この章は、天下を治めることを言っている。老子がもし天下を治めるならこうする、というのである。小国寡民とは、国を小さくすること。寡民とは、民を少なくすること。天下が治まりにくいのは、諸侯に大国があるからである。国が小さければ、民もそれに従って少なくなる。人に什佰(じゅうはく)するの器ありてというのは、或は舟車、或は武具など、諸侯が所持しなくてはならない道具を、十人前か百人前揃えていても、ただ備えただけで、用立つことはないようにする。又、民百姓の風俗、命を大切にすることを主意として、過分の望みをしない。故郷を去って他国に行き、立身を望むなどということはかつてないようにするのである。この三句が一章の大意である。

舟輿(しゅうよ)ありと雖も、これに乗るところ無く、甲兵ありと雖も、これを陣するところ無し。民をして復た縄を結びてこれを用いしむ。

この段は、十人百人の器があっても用いずというのを受けて、これを解釈したのである。舟あり車ありと雖も、他国に行くこともないので、これに乗る必要もない。又、昔は文字がなくて、縄を結んでものごとの心覚えにしたように、文字や書契を執り用いるほどの立ち入ったことはなく、再び昔のように縄を結んでこれを用いるようにする。

その食を甘しとし、その服を美とし、その居に安んじ、その俗を楽しむ。隣国相望み、鶏狗の声相聞こえ、民、老死に至るまで往来せず。

この段は、死を重んじ、遠く徙(うつ)らざらしむを受けてこれを解釈している。その食を甘しとしとは、自分の用いてきた粗食を天下の美食の如く思うこと。これは、世の中に美食というものがあることを知らないからである。その服を美とし以下も又同意である。皆な世間のことを見聞しないからだ。隣国相望み、鶏狗の声相聞こえとは、至って近いところをいう。ほんの近いところにあるので、あちらの鶏狗の声がこちらに聞こえ、こちらの声もあちらに聞こえる。しかし、その国の民は、老死に至るまで、互いに往来することはないのである。これは何事もその地で用が足りるので、自然と境界が

ら外へ出ることではなくて済むようになるからである。

老子がこの書をまとめたのは、修身のためにあらず。天下を治めるためである。従って、巻末に至って、人々に道を以て天下を治める効用を示した。すなわち、自分がもし天下を治めるなら、当世のように文華なこともなく、又、合戦争奪することもなくして天下泰平だろう、と。

小国寡民ということ、古来から、試みに小さい国家を得て治めたならば、という風に解釈しているが、それは間違っている。老子の意は天下を治めることにある。もし唯一の小国を先のように治めたとしても、隣国から侵入することがあった場合は、どうして無事なることを得ようか。前述したように、国を小さくし、民を少なくするの義とみるべきだろう。

古の制度では、大国は百里以内と決めたのだが、その実、晉・楚・斉・秦などは、はじめから数百里の地であった。これは小国を併呑してなったのであり、争奪の基である。又、人民も封境の内を自由に往来する者なので、百万石の国なら、民も又百万石の中を往来して、その中のあらゆることを見聞する。一万石ならば一万石の間に限られる。だから国を小にするほど、民の外出すること遠からず。その見聞するところ狭く、世の豪華な風俗などに遷移することがない。

老子の考えは、現在の諸侯の数が、千だとしたら、これを五千にも一万にも分けて、百里の国を五十里か三十里にするだろう。このようにすれば、天下は治まり易いというのである。

21・信言不美章(下篇第八章)

信言は美ならず。美言は信ならず。

この章は、第八章の終わりに、老子自ら著書の大意を残らず掲げたのである。先ず第一に、人の言に信言あり、美言あり。**信言**は、何事も実情を言うので、聞いて格別に味のあるということはない。**美言**は、上手い言葉である。美は上手という感じのことで、いかにも味があるようにみえて、元来は嘘を飾った言葉なので、実の用には立たない。

善言は弁ぜず。弁言は善からず。

又、言には**善言**といって、人のためになる言がある。これは弁舌に任せてすらすら言う言ではない。それだから、耳に通徹して感心する風ではない。**弁言**とは、自由自在に弁を馳せて、面白いようであるが、人のためにはならない。

知者は博からず。博者は知らず。

又、人の言に**知者の言**あり。これは真実の道理をみたものであって、博学多聞にわたることではない。**博者**とは、種々道具をたくさん並べ立てる。素人だましの学問で、親切の言ではない。以上の三説はおおよそ一意である。老子は、平生、信言をいって美言をいわない。善言をいって弁言をいわない。学問の流儀も、簡素的な道理をいって、道具をたくさんにすることはない。故に、世俗にあわず、五千言皆なその通りである。

聖人は積まず。既に以て人のためにして、己、愈愈(いよいよ)あり。既に以て人に與えて、己、愈愈(いよいよ)多し。

さて、老子の道は無欲を貴ぶ。常人は金銀財宝から一切のものを皆な己に積み蓄えるを貴ぶ。老子は、少しも己に蓄えるということなく、これを散じて人と共にするのである。これは俗人の最も難しいところで、とても行い難しと思うものだ。その実は、人のためにすれば、自分のものはいよいよ有るし、いよいよ増すものなのである。

その証拠は、范蠡(はんれい)が再び千金を散じたが、その身いよいよ富裕にして、陶朱公という天下第一の福人になったこと、そして漢の文帝が租税を免除したのに、府庫倉廩は益々富んで、五穀が不足することがなかったことなどをみればわかる。このことから、**積まず**ということの利益を知るべし。この道理しかと腹に入れるべし。

天の道は、利して而して害せず。聖人の道は、為して而て争わず。

もう一つの秘策がこの条項である。凡そ天地間の道理は、前に一利あれば、後ろに一害がある。これはものの数にして、知者でも如何ともすることができない。ただ聖人だけがその秘訣を心得ているので、上善を為して天道に則っている。

老子の道は無為を尊ぶ。しかし、為しても争わなければ、いくら為しても害はない。無為の無為たるところは、無為ではなく争わずにある。この訳を知れば、終日為して未だかつて為さず、という主意に当るのである。

全篇一利一害が相並ぶことを論じ、巻末に至って利あって害あらずといい、一部無為を主として、巻末に至って、**為して而て争わず**という。これが老子の第一の秘訣である。

大略は以上のようなものである。先ず最初に立言の体を合点し、その後この書を読むこと。その次は、無欲は身の利益であることをしかと知って、老子の言に安んずること。尚、その上の極意は、無為の中に為すあり、一切手を出さぬことと心得るのは、大なる間違いである。ここをしかと合点すれば、五千言はじめて世の役に立つのである。(以上)